

ハリウッド物語

16 佐恵美の思い

人かが電話番号を書いた紙をくれた。佐恵美は「もう一人じゃない」と思った。何度かミーティングに通いながら、佐恵美は止められるまで自分に食べさせることにした。同時に、「食べたものはすべて消化すべし。絶対にもごさない」と決意した。体重が増え、醜い姿を見る。再び運動を始め、自身の姿を見続けることで食事も次第に減ってきた。

佐恵美は回復した。同時に、探せば身近に友人がいることも学んだ。肩の力を抜いて生きよう。そう決めた。

佐恵美はこれまで十本以上の映画に出演。コマーシャルが多いが月一、二本のペースで役者として自活している。サスペンス・アクション映画「ザ・デ

ンジャラス/地獄の銃弾」(九四年)では、姉を殺されて復しゅうする忍者のような妹役で出演した。最後の場面の撮影で、監督に「お茶をたてるとか、お花をいけるとか、お線香でもいいから何か日本のなことをやって死んでくれ。そしてキモノを着て、走って鳥のように死んでくれ」といわれ、目の前に化学繊維のキモノが出てきた。日本の資本が入っても、日本を知らないハリウッドの「異国趣味」をあらためて痛感した。

正確なアジア像を伝えるためには、アジアから来た自分たちをもっと頑張りな

ければ変わらない、と佐恵美は思う。だから、映画作りもやりたい。来春には回想記を刊行の予定だ。

「今の自分は、薬に生きている。青空が青空として見える。人が私を通り過ぎてゆく。来る者は受け入れ、去る者は追わず、自分自身の旅を楽しめるようになった」

佐恵美はそう言って笑った。いい笑顔だった。(敬称略)

食べ過ぎではもどすプリミアの病は、異国で自由に生きるための一つの試練なのか。孤独と緊張の中で夢を貫こうとした女優中村佐恵美は、救済を求めてある日、仲間の紹介でO.A.ミーティングに参加した。同じような病に苦しんだ人々による癒(いや)しの集いである。ウェストハリウッドにある教会だった。男女十数人の輪に入った佐恵美は、思い切って「私は日本から来ました」と口を開けた途端、涙があふれて止まらなくなつた。

そのときの様子を、佐恵美は自らの回想記に記している。

……両親には決して伝えなかった悲し

みや憤り、恋人にも相談できなかったフラストレーション。友人にも話せなかった不安や寂しさなどが、一堂に会してこみ上げてきた。アメリカに来て四年間、外には出さずに一人で抱え込んできた様々な感情をため込んできた壺(つぼ)が地面に落ちて粉々に割れたようであった。「そうね佐恵ちゃんは悔しい思いをたくさんしたし、つらいこともいっぱいあったねえ」。自分をそう慰めてみると、もう止まらない。もっと悲しくなっていく。あーん、あーん、と声を上げて泣き出した。泣きながら、佐恵美はこれまでのことを話し、「私、とても寂しいんです」と正直にならけ出した。

「思い切って話してあげてあげたところ」。司会者が優しく聞いてくれた。何

笑顔